

become はナルか

—— 連結動詞 become の意味と用法

友 澤 宏 隆

〈Abstract〉

In this paper, generalizations are presented of the meaning and usage of the English linking verb *become*. The verb has a more restricted application than does its supposed Japanese equivalent, *ni naru*, which is a common and characteristic expression of the language. The English verb *become* is known to reduce its acceptability when used to describe such events as the reaction to an infinitive-denoted experience or the recent change of age/time/seasons. This can be explained in terms of the generalizations presented, as well as the availability of alternative expressions.

1. 序説

英語の動詞 *become* は主として、補語に名詞句や形容詞句をとる連結動詞 (linking verbs) / コピュラ (copulas) として用いられる。連結動詞 *become* は日本語では「……になる」と訳されるのが一般的であるが、ナル的な言語と形容される日本語において「……になる」という動詞表現が頻繁に用いられるのに対して、*become* の用法の拡がりには限定があり、それはその定訳である日本語表現の全体に対応するものではない。これは日本語を母語とする英語学習者に対する学習指導の際に注意を要する点でもある。

本稿では種々の例を考察しながら、連結動詞 *become* の意味・用法の諸相を明らかにすることを試みる⁽¹⁾。以下ではまず、種々の例とともに *become* の基本的な意味・用法について考察し、それに基づいて *become* の意味・用法に関する一般化を提示する。さらに、*become* を用いた表現の中で、容認可能性に問題があるとされる場合をとり上げ、それらについて提示した一般化の観点を中心として検討してい

くことにする。

2. become の基本的な意味・用法

become は “to begin to be or come to be something specified” (*MWALED*), “to start to be” (*OALD*⁸, *CDAE*², *CALD*³), “to start being” (*Collins COBUILD SD*³, Sinclair et al. 2004: 63) などと定義され, 「ある状態から他の状態に変化する」というのが原義である (小西 1980: 111)。次の例を参照:

- (1) He has just become a father. (*CALD*³)
- (2) He became prime minister in 1997. (*Chambers SD*)
- (3) He became a professional footballer. (*Collins COBUILD SD*³)
- (4) When you feed a current through the coil, it becomes a magnet. (Sinclair et al. 2004: 63)
- (5) The bill will become law next year. (*OALD*⁸)
- (6) Although I've known him for years, we didn't become close friends until recently. (*MWALED*)
- (7) Since then, nearly 2,000 people have become infected with the Ebola virus, and more than 1,000 have died from it. (*Time For Kids*, August 13, 2014)
- (8) Her supervisor complimented her on having become more assertive. Whether or not Rachel actually became more assertive is debatable. (Tannen 1986: 177)
- (9) Colleen says her new husband quickly became more and more controlling, insisting she drop plans for college and demanding she begin carrying a cell phone so he could reach her instantaneously. (Niven 2003: 150)

上の各例においては, いずれも主語名詞句の指示対象が変化し, 補語の名詞句・形容詞句が表す状態・性質を新たに有するようになった／なることが意味されている。たとえば (1)–(4) の場合は, それぞれ主語が指す人やモノが補語が表す身分・地位・職・機能を獲得し, 以前とは異なる状態・性質を持つ存在になった／なることを表している。また, (8)(9) の場合は, 各々その (意味上の) 主語が指している人の行動様式や性格が補語が表す状態に変化したことを表している。

このように become は主語名詞句の指示対象の状態・性質の変化を表すのに用い

られるのが基本であるが、それが補語としてとる名詞句の種類によっては、主語が指す人やモノ自体の内的な変化というよりも、その相対的な意味合いや位置づけの変化——外的な変化——を表す場合がある。次の例を見てみよう：

(10) In late July, two American aid workers in West Africa became infected with Ebola. They were brought back to the United States for treatment. Many Americans are wondering if the virus could become a problem here. (*Time For Kids*, August 13, 2014)

(11) The invisible wire that transfers emotions from one to the other also accounts in part for why many women do not want to tell their mothers about what's going on in their lives—especially about anything major that might be worrisome, like significant illness or problems at work. I was quick to tell my mother of small misfortunes, in order to receive the balm of her concern. But I did not tell her of serious problems, because if I did, I'd be sure to hear from her the next day, "I was up all night worrying about you." My problems became her problems, and I did not want to cause my mother to lose sleep—or to have to shift from seeking comfort to providing it. (Tannen 2006: 31)

(10) は、西アフリカ諸国において甚大な被害をもたらし、国民の生命を危険にさらす公衆衛生上の脅威 (problem) になっているエボラ・ウィルスはアメリカでは現在はまだそのような存在にはなっていないが、今後そのような存在になり変わる (become) 可能性があるかどうかに関心の的になっているということである⁽²⁾。この場合、become の主語名詞句 (the virus) の指示対象自体は同じものであるが、それがアメリカ国内において補語名詞句 (a problem) が表す意味内容を持つものとして位置づけられることになりうるか否かが問題になっている。(11) は、自分が深刻な問題を抱えているとき、それを母親に話すと母親が心配してしまい、もともとは自分自身の問題であった事柄が母親にとっても問題になってしまう [母親の問題にもなってしまう] ということである。この場合も、become の主語名詞句 (my problems) の指示対象は同じものであるが、それが補語名詞句 (her problems) の指示対象としても位置づけられるという変化が問題になっている。

これまで見たように、become はその主語の指す人やモノが変化を被り新たな状態・性質を獲得することを表すが、become と同様主語名詞句の指示対象の変化を表す get とくらべた場合、get は補語に「一時的な過程」を表す形容詞がくること

が多いが become は「永続的な状態」を表す形容詞をとると言われることがある(小西 2006: 163)⁽³⁾。上に挙げた例について見てみると, become はその補語の形容詞句・名詞句が表す状態・性質が同じ形で(文字通り永続的とまでは言えなくても)ある一定期間にわたって継続することが期待されることを表していると言うことができる。たとえば(1)の場合であれば, 主語名詞句によって指される人は補語名詞句(a father)の表す身分を新たに獲得し, 特別な事情が生じない限り同じ身分が保持されることを表している。(4)の場合は, 主語名詞句(it)の指すもの(the coil)に同じ物理的措置(feed a current)を施している限り補語名詞句(a magnet)の表す一定の機能が維持されることを表している。(9)の場合だと, 主語名詞句(her new husband)によって指される人の行動様式・性格が補語の形容詞句(more and more controlling)の表す状態に変化し, その同じ状態が今後も継続する可能性が高いことが示唆されている。

今まで種々の例とともに become の意味・用法について具体的に考えたが, これまでの考察から become に関して次の一般化を提案する:

- (12) become は, 主語名詞句の指示対象が内的・外的に変化し, 補語の名詞句・形容詞句が表す状態・性質を獲得することを表す
- (13) become は, 主語名詞句の指示対象の変化によって新たに獲得される状態・性質が同じ形である一定期間にわたって継続することが期待されることを表す

3. become の基本的な意味・用法からの逸脱

2. では become の基本的な意味・用法について具体的に考察し, その意味・用法について二つの一般化を提示したが, 以下では become を用いた表現のうち, 容認可能性に問題があるとされる場合——すなわち, 容認可能性が「問題になる」場合——をとり上げ, 提示した一般化の観点を中心として検討したいと思う。ここでは, 反応の不定詞の構文に become が用いられた場合と年齢・時刻・季節の変化の表現に become の現在完了形が用いられた場合について論じることにする。

3.1 反応の不定詞と become

Ilson and Whitcut (1994) は, 連結動詞の用法として, 「突然生じる事柄を表す場合は become ではなく be を用いるのがよい」とし, 次の二つを対照させている

(Ilson and Whitcut 1994: 97) :

(14a) I was sorry to hear that he'd left.

(14b) *I became sorry to hear that he'd left.

(14ab) は述語動詞 be, become の補語の形容詞に to 不定詞の補文が後続する形のものである。(14ab) の場合, 補語の形容詞はネガティブな意味を表すものであるが, それをポジティブな意味の形容詞に置き換えた場合においても同様の対照が見られる:

(15a) I was glad/happy to hear that he'd left.

(15b) *I became glad/happy to hear that he'd left.

これらの場合, 日本語では「(その知らせを聞いて) 残念な気持ちになった/うれしくなった」のように「(……に) なる」の形を用いて表現することができるが, 英語では become を用いた (14b)(15b) の形は容認不可である。これらにおいて, 連結動詞に続く「形容詞+to 不定詞」には二つの解釈の仕方がある。一つは Ilson and Whitcut (1994) によって示唆されているもので, 連結動詞の主語名詞句によって指される人 (= 話者) が to 不定詞の表す出来事に接した結果その反応として突然 (瞬時的に) 生じた感情を補語の形容詞が描写していると考えられるものである⁽⁴⁾。この場合, 主語名詞句の指示対象の (心の) 状態の変化によって新たな (心の) 状態が獲得されたとは言えないため, (14b)(15b) のように become を用いることは認められないことになる。もう一つの解釈は Duffley (1992) が提示しているもので, 連結動詞の主語名詞句の指示対象である話者は to 不定詞の表す出来事が生起する以前に, その出来事の受けとめ方 (それを肯定的に受けとめるか否定的に受けとめるか) に関して補語の形容詞が表す内容によって示唆されるような傾向を本来的に有しており, to 不定詞の表す出来事が現実に生じた際にその傾向に合致する反応 (補語形容詞が表す内容) が示されると考えるものである⁽⁵⁾。この場合も, 主語名詞句の指示対象の (心の) 状態に変化が生じたわけではないため, やはり (14b)(15b) のような become を用いる形は容認されないことになる。これはすなわち, いずれの解釈によっても, 上述の become の意味・用法についての一般化 (12) に反することになるということである。

上の場合, 当該の「形容詞+to 不定詞」に関してどちらの解釈をとるべきかは議論の余地があるが, 主節に to 不定詞が後続する場合は主節の表す事象が to 不定詞の表す事象に時間的に先行するという to 不定詞の未来志向性の一般的原則に鑑みると, 後者の解釈がより妥当であると見なされるであろう。これは同じ形をした

次のような表現の解釈と整合的であることになる：

(16) I am willing to pay a premium for a superior product.

(cf. *CDAE*², “premium”)

(16) は (14a)(15a) と同様、主節 (I am willing) の表す事象 (= 話者があることを実行することをいとわないと思っていること) は後続の to 不定詞の表す事象 (= 質のよい品物であれば少々高くてもお金を出して買うこと) よりも前に位置づけられているものである。この場合、もし話者の (心の) 状態が過去において変化してそう言ったと言うのであれば、主節の動詞に become を用いて次のように表現することができる：

(17) I became willing to pay a premium for a superior product.

(17) は (8)(9) と同類で、主語名詞句の指示対象の態度が補語が表す状態に変化したことを表すものである。

3.2 年齢・時刻・季節の変化の表現と become

3.2.1 年齢・時刻・季節の変化の表現

日本語では、年齢・時刻・季節の変化を「20歳になった」「正午になった」「春になった」のように「……になる」の形で表現することはごく一般的であるが、英語ではそのような事柄を表す場合 become を用いて次のように言うと、現代英語としては容認可能性に問題のある表現になる：

(18)??He has become twenty.

(19)??It has become noon.

(20)??It has become spring.

英語母語話者のインフォーマントによると、このような場合 become を現在完了形で用いた表現は格式ばっていて、文学的で古風な感じがするとのことである⁽⁶⁾。ただしこの場合、become を単純過去形にした次のような表現は慣用性 (idiomaticity) の度合いが多少高くなるとのことである：

(21) He became twenty.

(22) It became noon.

(23) It became spring.

さらに、become の現在完了形を用いた (18)–(20) に対して、それと描写対象の状況群を共有しうる次の be 動詞の単純現在形の表現群が存在する：

(24) He is now twenty.

(25) It is now noon.

(26) It is now spring.

インフォーマントによると、(18)–(20) と (24)–(26) のうち、英語母語話者は通常はほとんどの場合後者の表現群を用い、前者の表現群は用いないとのことである。

上の表現群 (18)–(20), (21)–(23) および (24)–(26) について、上記の判断を検証しその現実の使用の様態をさらに調査するために、Google books Ngram Viewer (<https://books.google.com/ngrams/>) によって1920年・1960年・2000年の各年におけるこれらの表現の出現頻度を検索した。その結果を示したのが次の表である⁽⁷⁾：

he has become twenty		it has become noon		it has become spring	
1920	0%	1920	0%	1920	0%
1960	0%	1960	0%	1960	0%
2000	0%	2000	0%	2000	0%

he became twenty		it became noon		it became spring	
1920	0.0000006074%	1920	0.0000000222%	1920	0%
1960	0.0000004573%	1960	0.0000000245%	1960	0.0000000553%
2000	0.0000001766%	2000	0.0000000468%	2000	0.0000000131%

he is now twenty		it is now noon		it is now spring	
1920	0.0000005003%	1920	0.0000004518%	1920	0.0000001730%
1960	0.0000001709%	1960	0.0000002397%	1960	0.0000000669%
2000	0.0000001213%	2000	0.0000001590%	2000	0.0000000911%

上の検索の結果から、年齢・時刻・季節の変化を become を用いて表す場合（すなわち、become の補語が twenty, noon, spring のような年齢・時刻・季節を表すものである場合）、現在完了形の出現頻度は各年とも皆無に等しく、一般に容認度がかなり低いことがうかがえる。他方、become の単純過去形の表現群や関連する be 動詞の単純現在形の表現群は、一部の表現・検索対象年を除いて、それぞれ記録された使用例が（表現・対象年によって差はあるが）ある程度の頻度で存在することがわかる。

3.2.2 年齢・時刻・季節の変化の表現と become の現在完了形

上では Google books Ngram Viewer の検索結果に基づいて、年齢・時刻・季節の変化を表す become を用いた表現とその関連表現の使用の実態を見たが、ここで明らかになった become の現在完了形の出現頻度および容認度に関する事実は次の観点から説明することができる。

まず第一に、一般に become の現在完了形の表現にはそれと描写対象の状況群を共有しうる be 動詞の単純現在形の表現が存在し、後者の使用が前者の使用を抑制する潜在的可能性を持ちうるということである。すでに見たように、年齢・時刻・季節の変化を表す表現として、become の現在完了形を用いた (18)–(20) は be 動詞の単純現在形を用いた (24)–(26) によって代替することが可能である。年齢・時刻・季節の変化以外に関する表現においても同様であり、たとえば次の (27)(28) の代わりに (29)(30) を用いることができる：

(27) The Ebola outbreak has become an international health emergency.

(28) She has become President of the National Personnel Authority.

(29) The Ebola outbreak is now an international health emergency.

(30) She is now President of the National Personnel Authority.

(18)–(20) および (27)(28) は主語名詞句の指示対象の状態が変化し、現在新たな状態が獲得されたことを表すものであるが、(24)–(26) および (29)(30) は発話時（現在時）指示と現在を過去・未来と対照させる機能を併せ持つ直示的な時間副詞の now によって、そのような変化を被った後の現在の新たな状態そのものを表すものである⁽⁸⁾。これはすなわち、両者は同じ状況群に対して言わば異なる視点から焦点を当てたもの——「変化の過程」か「変化の結果」か——ということであり、前者に対して後者は一種の機能的代用表現としての役割を持ちうると思なすことができる。変化の「過程」に対してその「結果」を焦点化する後者の形は、現代英語の表現一般の傾向性である結果志向性（および、静止表現志向性）を例証するものであり、そのような表現による代替可能性が become の現在完了形の使用の必然性を奪い、その出現頻度の低下を招くことになりうるのではないかと考えられる⁽⁹⁾。

第二に、(18)–(20) のように become の補語が twenty, noon, spring のような年齢・時刻・季節を表すものになっている場合、主語名詞句の指示対象の変化によって新たに獲得される状態がそのような特定の年齢・時刻・季節であるということになる。これについて気づくことは、そのような特定の年齢・時刻・季節は、その性

質上同じ状態が継続するものではなく、時々刻々と変化していくものだという事である。たとえば年齢の場合であれば、twenty (20歳) であると言っても実際には年未満の絶えず変化する端数(月・日・時・分・秒)があり、その端数を切り捨てた上で twenty と表現しているにすぎず、その年齢が本質的に同じまま継続するわけではない。そのように考えると、このように become の後に特定の年齢・時刻・季節を表す補語を置くことにより年齢・時刻・季節の変化を表す表現は、上述の become の意味・用法についての一般化(13)に完全に沿っているとはいえないものであるため、表現の一般的な安定性を欠くことになると考えられる。このような become の表現としての不安定性が、第一の要因と相俟って、年齢・時刻・季節の変化を become の現在完了形を用いて表す表現の出現頻度および容認度を決定しているのではないかと考えられる。

4. 結語

本稿では、英語の連結動詞 become の意味・用法の諸相を明らかにすることを試みた。初めに become の基本的な意味・用法を具体的に考察し、それに基づいてこの動詞の意味・用法に関する二つの一般化を提示した。その上で、become の用例として容認可能性が問題になる場合をとり上げ、それらの位置づけについて提示した一般化された基準を中心として考えた。反応の不定詞の構文に become が用いられた場合は主語名詞句の指示対象の状態の変化が存在せず、年齢・時刻・季節の変化の表現に become の現在完了形が用いられた場合は現在完了形一般に共通する現代英語の表現の一般的傾向性に符合した機能的代用形が可能であることに加えて、主語名詞句の指示対象の変化後の状態が本質的に同じ形で継続するとはいえないため、これらの表現は容認可能性に問題があることを論じた。これらはすべて、英語の become がそれと対応するとされる日本語の「……になる」とくらべて用法が限定的であることを示すものである。

注

1. 以下で単に become と言う場合は、連結動詞としての become のことを指すものとする。
2. この場合、become a problem を日本語で単に「問題になる」と訳するのは原文の真意の表現として十分ではないと思われる。これは、日本語の「問題になる」はその主語名詞句の指示対象の変化を含蓄するとは限らないからである。たとえば「彼の昇進の際に、彼の

素行の悪さが問題になった」という場合、通常は「彼の素行の悪さ」が単に（議論の中で）とり上げられたということを表し、その意味合いや位置づけに（例 (10)(11) と同様の意味での）何らかの変化が生じたことを意味するわけではないと考えられる。

3. これ以外に, become が「変化の過程」に重きを置くのに対して get は「変化の結果」や「変化の背後に存在する（変化を起こすことを目標とした）動作行為」により重点を置くという違いがある (cf. Quirk et al. 1985: 1174)。この違いは次の命令文における容認可能性の対照に典型的に現れる：

(a) *Become ready!

(b) Get ready!

Swan (2005: 103) も参照。

4. そのような意味において, この to 不定詞は「反応の不定詞 (the infinitive of reaction)」と呼ばれることがある (Jespersen 1940: 259-260)。Duffley (1992: 123) を参照。

5. Duffley (1992: 123-125) を参照。Duffley は連結動詞の主語名詞句によって指される人がその出来事の受けとめ方についてそのような本来的な傾向を有するか否かに関して, 形容詞の後に to 不定詞がくる場合と that 節がくる場合で違いがあるとして, 次の例を挙げている (Duffley 1992: 124)：

(a) I was glad to see the police car come around the corner.

(b) I was glad I saw the police car come around the corner.

- (a) の場合は主語名詞句の指示対象である話者は誰かが自分を救助しに来てくれることを期待して待っていて, 実際に警察の車が来るのが見えたときに喜んだことを表すが, (b) の場合は話者はそのような期待を抱いていたという前提はないものとして表されているとのことである。

6. (18)–(20), (21)–(23) および (24)–(26) に関する判断は一橋大学の Christopher Sullivan 氏による。Sullivan 氏には Google books Ngram Viewer による検索の方法についてもご教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

7. 各表において, 表現の出現頻度の数値は当該表現の冒頭が大文字の場合と小文字の場合の数値の和を示してある。

8. 時間副詞 now のこのような機能については, Huddleston and Pullum (2002: 1558) を参照。なお, このような now は become の現在完了形の機能的代用表現以外でも広く用いられる。以下にいくつか例を補っておく：

I'm now ready to answer your questions. (OALD⁸)

(あなたの質問に答える用意ができました／答えることができました)

Now with CD-ROM (Collins COBUILD SD³, 表紙)

((本辞典は今までは紙媒体でのみ刊行されていたが) 今度は CD-ROM 付きになりました)

EEA executive director Hans Bruyninckx said that EU nations had made considerable progress over recent decades to reduce the visible signs of air pollution, with cities now no longer shrouded in blankets of smog. (BBC News, October 15, 2013)

(今ではもはや街はスモッグに包まれるということがなくなった)

I now respect people who write books. It's a much more complex process than I thought. (The Telegraph, October 22, 2009)

(本を書く人たちに一目置くようになった)

Scientists now believe that the bones belong to a different species of reptile.

(MWAL^{ED})

Two-thirds of Americans now believe global warming is real.

<http://www.ns.umich.edu/new/multimedia/videos/21262-two-thirds-of-americans-now-believe-global-warming-is-real>

(今ではそのように信じるようになった／信じるようになっている)

Wind Power Now Represents 5% Of California's Electricity Generation

http://www.nawindpower.com/naw/e107_plugins/content/content.php?content.9326

(今では風力がカリフォルニアの発電の5%を占めるようになった／占めるようになっている)

9. 現代英語の表現一般の傾向性としての結果志向性・静止表現志向性については、毛利(1972: 43-52, 103-108)に興味深い考察がある。特に毛利(1972: 46, 105-106)を参照。

例文出典

Tannen, Deborah (1986) *That's Not What I Meant!: How Conversational Style Makes or Breaks Your Relations with Others*. New York: William Morrow and Company, Inc.

Tannen, Deborah (2006) *You're Wearing That?: Understanding Mothers and Daughters in Conversation*. New York: Ballantine Books.

Niven, David (2003) *The 100 Simple Secrets of Great Relationships: What Scientists Have Learned and How You Can Use it*. San Francisco: Harper San Francisco.

CALD³ = *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*, 3rd edition.

CDAE² = *Cambridge Dictionary of American English*, 2nd edition.

Chambers SD = *Chambers Student Learners' Dictionary*.

Collins COBUILD SD³ = *Collins COBUILD Student's Dictionary*, 3rd edition.

MWAL^{ED} = *Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*.

OALD⁸ = *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 8th edition.

参考文献

小西友七(編)(1980)『英語基本動詞辞典』東京:研究社出版。

小西友七(編)(2006)『現代英語語法辞典』東京:三省堂。

毛利可信(1972)『意味論から見た英文法』東京:大修館書店。

Duffley, Patrick J. (1992) *The English Infinitive*. New York: Longman.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Illson, Robert and Janet Whitcut (1994) *Mastering English Usage*. Hemel Hempstead: Prentice Hall International.

Jespersen, Otto (1940) *A Modern English Grammar (Part 5)*. London: George Allen & Unwin.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Sinclair et al. (eds.) (2004) *Collins COBUILD English Usage*, 2nd edition. Glasgow: HarperCollins.

Swan, Michael (2005) *Practical English Usage*, 3rd edition. Oxford: Oxford University Press.